

令和5年9月10日

# 南の風 488

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

487号の続きです。

コーチであっても、わからないことはあります。しかし思わず取り繕いたくなったり、知っている振りをしたくなったりすることもあるはず。ごまかせばその場は切り抜けられるかもしれませんが、ですが次にもっと深いことを聞かれれば、ごまかしにごまかしを重ねることになり、最後は「嘘」になってしまうこともあります。そこまで悪くならなかったとしても、コーチのごまかしの態度を子どもたちは見抜きます。この瞬間、プライドと引き換えにコーチとしての信頼を失ってしまうのです。

知らないことを聞かれたときにこそ、コーチとして信頼されるかどうかを試されるのではないのでしょうか。コーチとしての小さなプライドを捨て、勇気を出して「ごめん、それに関してはコーチもよくわからないから勉強してくる」と言えばよいと思います。誠実さや真摯さは信頼関係において強固な土台となるのではないのでしょうか。**「信頼」はチームマネジメントの中心であり、土台になります。**そして「信頼」の上には「戦術」「技能」があり、選手の意欲を積み上げるためにも「信頼」が欠かせません。信頼を失えば土台から崩壊します。**「信頼」はチームの核となるもの**です。

**コーチと選手の「信頼」を築くのは、コーチが発する言葉**です。話し合いの中で、多くの子どもたちがコーチを信頼できなくなるのは**「言っていることとやっていることが違う」**ときだと思えます。コーチという立場になると、**ともすると自分の言動の不一致に矛盾を感じにくくなる**ことがあります。**コーチだからいいだろうとか、これくらいは許されるだろうと考えがち**なのです。**コーチだからと軽く考えてやっていること**によって、**実は子どもたちの信頼を失う**ことがあります。

例えばチームのルールとして「遅刻はしない」と定めて、選手には厳しく守らせているのにコーチが時間にルーズだったりすることがあります。練習が始まってしばらくたってから、何もなかったかのように体育館に現れるのです。もちろん仕事の都合もあるでしょう。それならばはっきりと「今日は開始には送れるけど〇〇時までには行く」と伝えておかなければならないのです。

また「練習中は集中しろ」と言いながら、コーチはほとんどコートを見ていないということもありがちです。コーチの役割は、練習の効果を上げるために適切な指示を選手に出すことです。選手が一生懸命練習しているのに、それを見ていなければ指示を出すことはできないはず。また、「明日は〇〇を試合に出す」、とっておきながら出さないというのも選手を傷つけることになります。選手はそのつもりで心身ともに準備してきたはず。もちろん、試合展開が予想と違って出せなくなるということもあります。ですがそれを読み間違えたのはコーチの責任です。選手の責任ではありません。

コーチだからこの程度のことは許されると思うなら、子どもたちの信頼は得られないでしょう。相手が子どもだからと軽く考えてはいけません。大人同士の関係なら、「遅刻したのはいろいろ事情があるからでしょう」と都合よく解釈してくれるかもしれませんが、でも子どもたちは素直だからこそ真っすぐな目でコーチを見ています。こういう言行不一致を子どもたちは真っすぐに解釈します。上に立つ者なら、守れない約束はしてはいけず、**交わした約束は必ず守る責任がある**のです。